

(英語版)

(アラビア語版)

令和五年一月

SF小説…「ナクバの東」(六十二)

第二部…「エスニック・クレンザー(民族浄化剤)」

六十一 エスニック・クレンザー(4)

將軍の耳にドクター・ジルゴの口を借りた悪魔の声が聞こえて来た。

Λ。パレスチナ人だけがこのウイルスに感染する。感染したパレスチナの若い女は卵子が無くなるかごくわずかしが残らない。数世代の長い時間がかかるが、パレスチナ人は着実に滅亡への道を歩み始める。しかもこれはすでに生まれた人間を殺すことにはならないから殺人でもなければホロコーストでもない。V

彼はウイルスの人体実験にゴーサインを出した。彼は軍医総監に電話し、実験を軍の管轄下で極秘に行うこと、実行部隊の軍医たちには真実を知らせないことを念押しした。

人体実験には大都市のベッドタウンN市が選ばれた。そこにはパレスチナ人とアシケナジムを含むユダヤ人の老若男女が混住しており、被験者の人数、構成などが理想的だったからである。すぐ近くに陸軍病院があったことも選ばれた理由の一つであった。

被験者には来るべきインフルエンザのシーズンに備えた新型ワクチンの予防接種だと知らされた。そして接種後多少発熱するものの数日で収まるが、もし高熱が出るようであればすぐに軍病院に連絡するよう指示があった。



接種はごくスムーズに実施された。ユダヤ人たちは軍が関与していることに安心し、パレスチナ人たちは軍に盾突けばどうなるかこれまで何度も思い知らされているので従順に従った。

接種して数日後、発熱が収まらないと病院に駆けつける者が少なからずいた。そのほとんどはパレスチナ人で、しかも閉経前の成人女性或いは女の子であった。ユダヤ人の場合は、何割かの女性が相談に訪れたが、大半の女性とほとんどの男性は発熱症状が無かった。

その結果を聞いたジルゴは予想通りであったとほくそ笑んだ。最後に残されたのは女兒を含む閉経前の女性の生殖検査だけであった。

(続く)

荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)

前節まで：<http://ocininitiative.maeda1.jp/EastOfNakbaJapanese.html>